

ネガティブポライトネスから見た「だろう」文について

— 日中韓母語話者による作文を資料に —

胡嘉誠(埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程)

本稿では、JCK 作文コーパスを対象に、「だろう」の推量用法を注目し、断定回避の程度から、情報は書き手と読み手の情報に属すと判断する。その上、命題は発生しているかどうか、書き手が情報を自分の領域内に限定するかどうかによって、三つのタイプを分けた。

その結果、タイプ 1 は未実現の命題に対して、話し手と聞き手の領域内に情報を持つにかかわらず、命題が成立するのに断定の権利を持っていないため、断定回避の権利を生じる場合だと定義した。タイプ 2 は既実現可能の命題に対して、話し手と聞き手の領域内に情報を多少持っている。成立するのに断定で取られる。しかし、命題が論理的にいくつかの可能な事態があるため、断定の権利があっても、断定回避を生じる場合と定義した。タイプ 3 は出来事に対して、話し手は自分の考慮や心理的要素などで命題に影響を与える場合、聞き手と比べ、情報は必ず自己の領域内でしかないため、話し手だけ命題が成立するのに断定と回避の権利がある場合と定義した。

級外項目「V てたまるか」について

— 「負けてたまるか」と「負けるものか」の比較から —

井上直美(埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程)

「～てたまるか」という表現は、『日本語能力試験出題基準〔改訂版〕』に記載のないいわゆる「級外項目」であり、日本語学習教材類に記述が少ない。また、2 級項目の「ものか」同様、反語専用形式だとされる。そのため、どんな条件下で「てたまるか」と「ものか」が置き換えられるかが問題となっている。そこで、本発表ではコーパス(BCCWJ)を用いて実例を収集し、両形式を比較することによってその特徴を分析した。その結果、「～てたまるか」は、①受身形や無意志自動詞の出現率が高く、意志的行為を表す動詞と共起しにくい②高頻度の語は「～されて・負けて・死んで・あって・わかって」である③使用場面は、伝達を目的としない「心内発話」が約 7 割を占めることがわかった。また、「かまうものか」のような「ない形」の代用をする「ものか」や、「彼女が負けるものか」のような他者主体の「ものか」と「～てたまるか」の置き換えの可否についても検討した。

文学作品における文化積載語の翻訳方法

— 『雪国』 の訳本を例に —

万思雨（福建師範大学大学院）

本研究の目的は文化積載語の翻訳操作性について生成語彙論の理論を利用し考察することである。文化積載語に関する従来の研究は、翻訳方法に焦点をあてたものが多いが、操作性が不十分という問題がある。本研究では、文化積載語における連想役割とクオリア構造にある4つの役割は重要性があることを提示したうえで、認知言語学の理論である生成語彙論のクオリア構造とコンテキストの結びによって分析した。その結果、この手で分析すれば翻訳操作性が高められることと訳語の質が判断できることは明らかになったが、文化積載語における翻訳だけではなく、ほかの名詞における翻訳にも活用されることができる。重要性について、連想役割が一番重要である。次は目的役割、形式役割、構成役割、主体役割である。操作性について、まずは語積項目を確認する。その意味に対応できる中国語があれば直接対応できる、さもないとクオリア構造とコンテキストによって分析する。

人を表すことばの特殊用法について

朱良国（埼玉大学人文社会科学研究科博士後期課程）

本稿では、人と人をコミュニケーションする際に、自分や相手または第三者をどのように指すかという問題に注目し、ひとを表すことばに反映されている対人配慮の視点から考察した。今までの先行研究では、日中両言語における呼称表現について呼称の分類、機能を明らかにしたが、ことばを選択する際に反映されている対人配慮の分析が不足していると分かっている。日本語の特性を考えただけで、呼称を使用対象によって、自称詞、対称詞、他称詞に分け、ことばの機能によって、人称代名詞、親族名称、社会共通名称、役職・職業名称、個人氏名名称の5分類にわけることにした。さらに、日中両言語の差異を明らかに明示するため、使用条件によってメイン使用呼称と補助使用呼称と分けて考察方法を提出した。以上の分け組と考察手段で中国語自称詞について考察を試みた。結果、中国語自称詞の場合、人称代名詞の「我」は制限がなくて使用され、しかも対人配慮がほぼ含まれていないが、親族名称で自称する場合は、制限があり、対人配慮の配慮も含まれていることが分かった。

ノの有無による文末ダロウカ類の使い分けについて

—日本語母語話者作文の使用実態から—

松本匡史（埼玉大学人文社会科学研究所博士後期課程）

本発表では、JCK コーパスにおける日本語母語話者の使用実態から「ダロウカ」「ノダロウカ」の使い分けについて考察し、日本語学習者のための産出ルールを提示した。

ダロウカ類の用法を先行研究を参照し、「自問的問題提起」「断定回避」「婉曲的質問用法」に分類した。そのうち、「自問的問題提起」は疑問詞の有無によって「ノ」の使用有無の違いが見られ、「断定回避」では「ノ」を用いない方が自然であることが見られた。「婉曲的質問用法」でも「ノ」を用いない方が自然であると考えられる。

本発表では、作文コーパスをもとに、産出のための使い分けルールを提示した。レポートや論文などを書く日本語学習者に提示するためのルールを念頭に置いているため、話しことばには適応しないが、今後対象を拡大していきたい。